

ひがしくすストーリー

HIGASHIKU STORY



明治末ころのタマネギ出荷の様子

大友亀太郎に伴われた人たち

大友亀太郎 伏籠川上流地域を開拓

大友亀太郎は元村（旧札幌村）開拓の祖と言われています。天保5（1834）年、相模国足柄下郡西大友（現在の神奈川県小田原市）の農家に生まれ、幼いころから、昼は両親と共に働き、夜は勉学に励みました。

成長するにつれ、「人の一生はいろいろなことを学び、社会のためにより多く尽くすべきである」との思いから22歳のときに近郷出身の偉人、二宮尊徳の門をたたきました。亀太郎は尊徳晩年の弟子として教えを受けながら、昼は土木事業、夜は勉学に励み、土木技術習得に努めました。

安政5（1858）年、亀太郎は江戸幕府から、ほかの弟子たちと一緒に蝦夷地の開拓を命令されました。

このとき、幕府の役人として武士に取り立てられ、大友の姓を名乗りました。蝦夷地に渡った大友は箱館近くの木古内、大野の開拓に成功。引き続き石狩地方の開拓を命令され、慶応2（1866）年、伏籠



大友亀太郎と御手作場の造成に使用した測量器



川のの上流地域（現在の北13条東16丁目付近）で、御手作場の造成を始めました。

農業で活躍する人が現れる

このとき、大友とともにまず9戸35人が御手作場に移住してきました。ほとんどが東北・北陸出身者で、江戸時代の末期ころに箱館付近に渡り住んでいた人たちです。明治3（1870）年、大友は北海道を去りましたが、移住した人たちの中から農業で活躍する人が現れます。

そのうちの一人、高木長蔵は越後国の出身です。慶応元（1865）年、土木技術を生かすために箱館に渡り、木古内を開拓していた大友と知り合いました。

高木は大友の求めに応じて御手作場に移り住み、開拓に協力。明治維新により時代が変わってからは本陣の用掛になり、名字帯刀を許されました。

明治8（1875）年に本陣が廃止されたため、元村に戻り農業に従事。洋式の農業方法を取り入れてリンゴ栽培を盛んに行い、元村での果樹栽培の草分けになりました。

開拓使が協力を求める

慶応2（1866）年に御手作場の造成が始まってから、明治元（1868）年の末までの間に、御手作場に移住した人たちは総戸数23戸、87人を数えるにいたりしました。

明治維新による時代の変化は、御手作場に移住した人たちをも巻き込みました。明治2（1869）年、新政府は開拓使を設置し、現在のJR函館本線から南の一带に札幌を建設する計画を立案。江戸幕府を倒した新政府にとって、御手作場以外の場所を選んで札幌建設を計画した

ことは当然のことでした。しかし、開拓使は開拓の人手を確保する必要に迫られていたので、御手作場に移住していた人たちに協力を求めました。

開拓使の政策のもとで

明治3（1870）年、開拓使は現在の北7～8条、東5丁目～7丁目の地域に牧場を開設。物資の運搬用や乗用の馬を飼いました。御手作場にいた人たちはまずこの牧場で働きました。



現在の北7条東5丁目。右の斜めの道は、牧場の外周の跡と言われています。

元村では後に馬を生産する人が現れました。森田吉之助はその一人で、慶応2（1866）年に大友に伴われて御手作場に移住した人です。馬の生産に力を注ぎ、育てた馬が宮内省に買い上げられたほどでした。

また、開拓使は現在の北8条～9条、東4丁目～5丁目付近に生産局を設置。これは現在の農業試験場や畜産試験場のような施設です。輸入した作物の種子をまず東京で試してから、ここに移し換えて試験栽培したり、鶏、豚、馬の生産も試験したりしました。ここでも御手作場にいた人たちが働きました。

明治15（1882）年、開拓使が廃止されました。このころまでには、御手作場から開拓使の仕事に駆り出された人たちは元村へ戻りました。戻ってからは農業に従事し、元村発展の基礎を築いたのです。

タマネギ栽培が始まる

北海道にタマネギが入ってきたのは明治4（1871）年のこと。開拓使が米国から輸入した種子を札幌で試作したのが始まりです。開拓使に雇われた米国人技師ルイ

ス・ペーナー、札幌農学校教授ウィリアム・P・ブルックスは、元村の農家にタマネギ栽培を指導。初めは、冬を越すための野菜として、自分の食べる分だけを作る小規模な栽培が続きました。元村では、明治時代の初めから、リンゴ、ブドウなどの果樹栽培が盛んでしたが、後に病虫害による被害を受けたので代わってタマネギ栽培が広がったのです。伏籠川流域の土壌がタマネギ生育に適していることも好条件でした。

商品として栽培する

タマネギを商品として本格的に栽培した先駆者が中磯吉。慶応3（1867）年、大友の呼びかけに応じて御手作場に移住した人です。

明治13（1880）年、1ヘクタールほどの畑にタマネギを栽培。良質のものを収穫し、伏籠川を船で石狩まで運び、小樽を経て函館や東京まで売りに出かけました。

しかし、売り上げは思うようには伸びず、販売は失敗に終わりました。

販路拡大を目指した親子

鳴海寅助は、慶応2（1866）年、津軽から蝦夷地へ渡り、箱館近くの大野に居住。そこで大友と知り合い、御手作場に移住しました。時代が明治に変わってからは、タマネギ栽培に励みました。販路拡大にも熱心だったそうです。息子の清次郎は、父の意思を継いで販路をシベリアに求め、ウラジオストクに赴いて売りました。

草創期に活躍

元村から始まったタマネギ栽培。後に東区の母体となった札幌村の農家は、栽培に心血を注いで、村を一大産地にしました。タマネギ栽培の草創期には、大友に伴われた人たちの活躍があったのです。

水辺の記憶～モエレ沼

卵形だったモエレ沼

「モエレ沼」は古い地図に「モエレペットー」と書かれています。この名前は「モイレ（①静かである②流れ



モエレ沼（昭和20年代ころ）

の遅い）・ペツ（川）・トー（沼）」というアイヌ語に由来し、ゆったりとした水の流れからこう呼ばれるようになったと考えられています。

モエレ沼は豊平川の度重なる洪水やはらんできた三日月湖と推定されています。今は馬蹄形ですが明治時代以前は周囲12キロ、卵形の大きな沼でした。

明治時代にはS字に近い形に変わっていき、大正時代に現在のようになりなりました。モエレ沼の名前が定着したのもそのころです。

モエレ沼の水を引く

モエレ沼の北側に中野という地区がありました。篠路村の一部だったこの地区で本格的な開拓が行われたのは明治27（1894）年のことです。貴金属時計商を営む中野四郎が小作農を募集して開拓したことから、中野開墾と呼ばれました。